



彩画人頭飾付戦士文様双把手付壺

口径17.2 幅32.0 奥行29.7 高24.4 (cm)

ペルー、ワリ文化(後700-1000年頃)

◆◆ 館蔵品紹介 ◆◆

今回は今秋より開催する「賑やかな器・物語る布—古代アンデス工芸への旅—」展(p.10参照)に出品予定の土器を取り上げた。

ご紹介するのは、ペルー、ワリ文化の土器である。口縁部をやや外反させた瓶型で、左右に把手が付く。器側面には大きく両腕を^{かめ}上げ正面を向いて立つ男性像を、首から下を彩画で、頭部のみ別に作り貼り付けた立体表現で表している。研磨された赤褐色の地色に、黒、青灰色、白、ベージュ、黄土、赤褐色の濃淡等の彩色が施され精緻な印象を与えている。

男性は両手には槍と棍棒を握っていることから戦士と考えられる。そろばん玉状の突起物(棍棒頭、一説には毒キノコ)がある被り物を被っているが、同様の被り物は、先行するペルー北部海岸地方、モチェ文化(紀元後100-800年頃)の戦士像(写真上館蔵)にも見られ興味深い。



表紙の土器の戦士が着ている貫頭衣にはベージュと赤褐色のN字型の牙を剥く動物の横顔が交互に表されているのは当時高度な技術発展を見せていた綴織による文様であろう。白い襟飾りのついた肩の上にも牙を剥く横顔が描かれているが、大きな飾りを垂らした耳は、より人間的である。注目したいのがこの「獣人」の眼である。右の顔の眼は菱形の、左は蛇形の縁取りがされているが、これはワリ文化を遡ること2000年ほど前の形成期中期の石像や土器に既に見られる表現である。「形成期」とは中南米考古学の時代区分では、神殿建築や土器製作が開始され、文明の基礎が築かれた時期である。この頃のアンデス文化の彫刻や土器、染織品などにはジャガーやピューマ等の猫科動物を思わせる牙を剥いた動物や獣人が盛んに表され、当時の神性表現と考えられているが、このワリの土器の獣人文様も遠くその流れを汲むものなのであろう。

戦士の腕を上げる正面向きの立姿も形成期の神

像表現に見られるが、より近い関係は、ボリビア西北部の高原地帯に広大な神殿を築いたティアワナコ文化の浮彫に見ることができる。この遺跡に建てられた門形遺構、通称「太陽の門」(写真下 井上撮影)の浮彫に表された神人や鳥人文様がワリの土器や染織品に繰り返し表れており、ワリ文化の影響があった地域を探る手がかりのひとつとなっているのである。



そもそもワリはペルー中部高地アヤクーチョが発祥の地とされる文化で、ティアワナコ文化と何らかの関係をもちながら次第に勢力を伸ばしペルー北部地域まで達し、アンデス文明最初の帝国を築いたと考えられている。ワリがどのような手法で広大な領地を獲得していったかはいまだ不明だが、道路や灌漑などの土木技術や、織物や土器をはじめとする工芸製作の技術に優れていたことは遺構や遺物から良く知られ、後にインカ帝国(紀元後1430頃-1532年)にそれらが受け継がれたとされる。2012年に発掘されたエル・カステージョ遺跡はモチェ文化の勢力範囲の南端に位置しており、ワリによる征服活動を示す遺跡として注目されている。ちなみにこの遺跡からは顔面を赤く塗られた貴族とみられる女性のミイラが見つかったが、表紙写真の土器の戦士の顔にも赤い彩色がある。これは死者に付き添うことを強く意識した表現なのか、あるいは埋葬された戦士その人を写した可能性もある。

この土器の作り手は過去の神像表現や征服地の意匠(ここではモチェ風の被り物)など多様な要素を盛り込むことで戦士を超人間的な力を持つ者として描こうとしたのだろうか。固く喰いしばった歯をむきだしにした表情は、あたかも最強の獣神パワーが乗り移ったかのようなのである。

(井上 則子)



第二代・遠山一行理事長の訃報に接して

館長 関口 正之

当財団法人・遠山記念館の活動と運営管理を、第二代理事長として四十一年間にわたってお導き下さった遠山一行氏は、2014(平成26)年12月10日に逝去されました。享年九十二歳でした。

遠山一行氏は、東京大学大学院において音楽美学を専攻され、二十歳代前半の1946(昭和21)年6月からは、毎日新聞誌上で音楽評論を始められました。1967(昭和42)年には雑誌『季刊芸術』刊行を主宰され、美術・文芸をも視野に置いた芸術全般を論じて、当時の芸術評論の思索の水準を高めておられました。1972(昭和47)年8月、初代理事長で御父上の遠山元一氏が亡くなれると、直ちに遠山音楽財団理事長に就任されました。翌1973(昭和48)年10月からは当館の第二代理事長となり、音楽評論活動における多忙な毎日に加えて、遠山邸の公開と付属美術館における運営管理の責任をも背負われ、遠山記念館における美術分野の活動をも指導して下さいました。

とくに、1995(平成7)年秋には、当財団発足二十五周年を記念して東京・根津美術館を会場として、当館所蔵作品の中から優品を選んで展示した『百華の宴』展の開催に盡力され、他館に注目された展覧会として盛況の裡に無事閉幕できましたことは、当館の歴史の中では輝やかな成果でした。2013(平成25)年9月に第二代理事長を退任されるまでの四十一年間、当館の活動を支えて下さったことに対し、当館全員が心から感謝いたすとともに、御冥福をお祈り申し上げます。

同年10月からは、第三代理事長として遠山公一氏が就任されました。遠山公一氏は、第二代理事長の長男、慶應義塾大学文学部教授、西洋美術史学専攻。故遠山一行理事長に劣らぬ指導力と見識を以て、新たに公益財団法人となった遠山記念館の運営を先頭に立って推進することを大いに期待されております。

飯塚鳳齋作 笈形器局の形態考

久保木 彰一

美術の作品や作家を研究していくと、この作品制作に際して、これを参考にしたのではないか、これから刺激を受けて、そこに独自の表現を工夫していったのだらうと、作家の心の内を伺うことができるケースがありうる。源泉などではなく、小さなアイデアであったとしても、それを見出せたとしたら、作家の崇高な創作の瞬間に立ち会えたのと等しく、万が一の幸運である。創作記録などないのが普通だから、これが元だと推す根拠、可能性をどこまで証明できるかが問題である。周辺の状況証拠を固めていっても、最後に推理の飛躍ができないとなかなか難しい気もしている。

と、威勢よく書き出しては見たものの、これから述べる内容はまだまだ跳躍力不足で、もしかしたらこれを見たのかも知れない、というレベルであることをお断りしておく。

なとなれば、時空を隔てた2つの作品のかたちがよく似ていて（私にはそのように見える）、偶然の空似とは思われないのである。

作品は、竹工作家の2代 飯塚鳳齋^{いいづかほうさい}（1872-1934）が、大正14年のパリ万国装飾美術工芸博覧会で名誉賞を獲った大作「笈形器局」である。

昨年の「調度と和家具の美」展^{せいどとわぐさのび}に出品して注目された、修験者の背負い箱である笈^{あじろ}のかたちをした煎茶道具入れである。

大きく曲がった四柱竹に、籐^{とう}のつるで化粧結びに連結されたとの面も、細竹ひごを繊細に編んで造られる。正面の網代編みの観音扉^{あじろ}には、意表をつく斜め節目の亀甲竹^{きっこうたけ}の門を縦に入れ、周りは六つ目編み、そして上下の台輪や天板と両側面、背面は、開き網代のくずし編みにして、高度で変化のある技巧を遺憾なく見せている。竹編みものながら一分の隙も無く、緻密を極めるその仕事には鳳齋の並々ならぬ意気込みが見て取れる。

局とは、しきる、部屋の意であるように、扉を開ければ中央に竹編み棚があり、上下2つの空間



高 60cm
奥 36cm

に分かれ、収納がし易くなっている。

また、笈形のおいとは、本来は書物などを入れて背負う箱のことで、仏教の道具として中国より伝わり、山伏や高野聖などが仏像、経典ばかりか、行脚に必要な身の回り品を収めるのに用いた。修行で使ったというよりも奉納品であろう静岡県浜松市大福寺の金銅板張装笈や、福島県立博物館の椿彫木彩漆笈（ともに室町時代・重要文化財）などは木板を箱型（やや将棋の駒形）に組み、加飾されたものである。寺や郷土資料館などの什物となる竹製笈の追跡はまだだが、長野県諏訪市正願寺に残る松尾芭蕉の弟子曾良が使用の笈は、竹の大きな行李を縦型にして背負い紐をつけた、四柱竹を入れる鳳齋作笈とは構造が違うものである。

さて、この鳳齋作笈形器局には、大正14年12月26日付の「巴里萬國装飾美術工芸博覧會第三回情報 日本産業協会」の小冊子が付属していて、2ヶ月前にパリ グラン パレにて行われた褒賞授与式の様子や、高価な作品は売行きが悪く、仏貨の暴落のため売上げ決済に問題が生じていることなどを伝えている。次に受賞者の一覧表が続く、

第八類木材工藝及同工業の名誉賞に「東京 飯塚鳳齋」の名が記されている。興味深いのは、同じく名誉賞の4人前に「東京 前田南齋」がいて、南齋は遠山記念館の創立者遠山元一が最眞にした江戸指物の伝統を継ぐ木工家である。昭和11年の遠山邸竣工にあわせて調度和家具を30点も受注制作を行った作家で、この時の出品は「梅文象嵌二曲屏風」で、象嵌は木内省古の合作であった。

上記冊子の他に2枚の印刷抜刷りがついており、この笈形器局の正面、側面、内部写真と和服姿の鳳齋の肖像写真を入れたモノクロ印刷物、及び、鳳齋の達筆による「大正拾四年十月名誉賞受領 佛国巴里萬国美術工藝博覧会出品々 笈形器局 原形鎌倉時代 鳳齋」との墨書を図版印刷した1枚である。

ここで、鳳齋自ら、この作品の原形は鎌倉時代と言っている。これだけではどこにある笈なのかともわからず、残念ながら種明かしにはならない。大正時代のころには現存していたものか、単に筆者の捜査不足なのか。鳳齋は鎌倉時代と認めた笈を手本にしたというのだが、今のところ鎌倉時代に遡る笈の作例を見つけることができない。

鎌倉時代の名画「玄奘三蔵像」(東京国立博物館蔵・重要文化財)で、三蔵法師が背負っているの



(上半身部分) 東京国立博物館蔵
Image:TNM Image Archives

は、竹製の笈である。S字に大きく蛇行する竹を蔓で結び、細竹を編んで白く塗った網代の腰板、側板で組み上げている。前へ迫り出た上部には笠が付き、陽射し避けと前傾姿勢で楽な歩行ができる機能的な形態であった。側面の窓に連珠のよ

うに見られるものは、貴いインドの経巻の木口である(実はインドに紙の卷子はなかった)。砂漠踏破の難行苦行に負けない玄奘の精神力は尋常ではないが、この竹製笈の収納能力と強度も並外れていたはずだ。宋・元時代の寧波仏画の作風を請ける絵であり、これこそ元祖 中国唐代に遡る竹製笈になるのであろう。ただ、この特殊な形から、上下段を切った中段だけのような鳳齋の笈形器局への展開は難しいのではなかろうか。

それでは、先ほど空似とは思われないといった、もう1点を紹介しよう。江戸時代前期の文房具「蔦蒔絵文台硯箱」に見られる笈の図像で、文台天板左と硯箱の蓋の表裏に3ヶ所、高さ7.5cmの小さな図である。緻密な蒔絵表現で、竹節をしっかりと地につけ、曲がった竹筥による前かがみの笈が、蔦の葉が茂る土坡にゆったりと置かれている図になる。



文台天板左
笈の部分

硯箱 高6.8
28.7×26.7

文台 高9.7
35.0×59.5cm



どうして笈が一つだけ、忘れられたようにあるのかといえ、横に添えられた千歳飴のような結び文(手紙)とともに留守模様といって、物語の

主人公をわざと省いて、持ち物だけでストーリーを暗示させたのだ。雅な謎解きの遊び模様で、蒔絵や小袖の意匠に好んで用いられた。古今和歌集、源氏物語と並んで公家や武家の女性が愛好した伊勢物語が出典である。第9段、駿河国 宇津の山にて、東下りの在原業平が修行者と出会い、詠んだ歌を都の恋人に届けてと文を託した話で、笈は修行者の象徴であり、周りの蔦はつた楓の茂る宇津の山道を表している。

3図ある笈の細部は、亀甲に菱文(文台)、七宝と六つ目編み(硯箱蓋表)、連段網代編み(硯箱蓋裏)と変化をつけ、開閉の扉も文台では背負い紐の反対側に、硯箱の2図では紐と同じ内側に付けている様子である。

この蔦の細道文台硯箱は、江戸前期の蒔絵師田付長兵衛尉高忠の銘があり、津軽家に伝来したもののだが、外箱には「東山大相国義政公禁中江進上蔦之細道硯文臺之写 田付長兵衛」とある。この写しのもとは室町時代の将軍足利義政の時のものとされる。そして面白いのは、この作品とほとんどそっくりのものが3点、宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵されている。五味聖氏の「蔦細道蒔絵文台・硯箱について－修理報告をまじえて－」(紀要第13号)によれば、①江戸時代に宮中にあった御在来品、②明治9年に桂宮家からの献上品、③明治8年上杉家からの献上品であり、上杉家伝来の添状には、「一、此蘿(蔦)細路の文臺硯箱東山慈照院殿御道具に而御座候処に 禁中様御宝蔵へ入申候其後太閤御申をろし少もかはらざる様に御写被なり由に候 一、此文臺太閤女中方へ被下置其以後方々仕し処を手前へ留置候」と記されている。東山御物であったものが禁裏に献上され、それを豊臣秀吉が写しを作らせて女中方へ与えたというのだ。

そして、この上杉家伝来品は明治14年の第2回観古美術会に出品され、明治30年までにこれら御物3点は美術展覧会、漆工競技会に幾度も出品されたという。さらに明治38年に、帝室博物館監査掛評議員を務めた国学者 小杉楹^{すぎむら}らが開催した好古会第43回春季研究大会にて、遠山記念館の津軽家伝来品が出品され、現在所在不明

の同種の松平家伝来品も同時出品であったという。蔦の細道文台硯箱は都合5点も存在し、明治年間の美術展覧会でよく知られる名品であったようだ。

明治35年から本格的に作家活動を始め、43年に栃木から上京する飯塚鳳齋であったから、蔦の細道文台硯箱の笈を実見のできる時期はちょうど重なっている。

さらに、遠山記念館からも出品した五島美術館の「伊勢物語の世界」展 図録所収論文、小松大秀氏「漆芸文様にみる伊勢物語」にて、先述の蔦細道の意匠を、桃山期に流行したデザイン上の新機軸を取り入れた桃山様式とされ、それとは異なるもう一つの系統があったと説かれる。畠山記念館蔵の「蔦細道蒔絵硯箱」や東京国立博物館の「蔦細道蒔絵文台硯箱」(田付長兵衛作)のように、印籠形の竹編み籠に2本足がつく笈を表しているのがそれで、こちらの笈のある図柄を室町期に完成した伝統的な表現に則ったものとされる。蒔絵意匠に表された竹四足の形の笈は、桃山時代から登場するということになるのか。

鳳齋が見た鎌倉時代原形の探索は、なかなか進展しないが、鎌倉時代の絵巻の中に2つの笈資料を見つけた。13世紀半ばの制作と想われる「西行物語絵巻」残巻2巻のうちの1巻(文化庁蔵、旧萬野家本)、旅に出た西行が高野山を進む場面で、曲がった2本足の背負子^{しよりこ}に座布団状の収納器を括って負っている。手に持つ笠には網代のような編み目が細線で書かれ、座布団に線はないので、竹製の笈であるかどうかは分からない。

もう1点は、同じく鎌倉時代13世紀のものと考えられる「白描伊勢物語絵(梵字経刷)」の断簡で、大和文華館蔵の1葉が、伊勢物語第9段「宇津山」に当たる。墨だけの白描画に木版刷りで『光明真言』の梵字が重ねられ、図柄を見分けづらいが、修行者の後ろの樹にもたせ掛けられた笈が竹製かどうかは判別しがたい。

原形の荷を負う道具・笈の追求はしばらく置いて、飯塚鳳齋は、笈の形態をとる煎茶道具入れとして、この笈形器局を制作したのだが、中国から日本に煎茶が入ったのは、江戸時代前期に黄檗宗

の隠元禪師(1592-1673)が喫茶法をもたらしからである。そして、煎茶中興の祖 売茶翁^{ばいさおう}(1675-1763)が京都で自ら売茶を行って喫茶の精神を広め、没後も文人や知識人から受け入れられ、それが近代へ継承される。近世に舶載した煎茶道具や日本産の道具の中に、箴形の道具が存在するのか、それとも鳳齋独自の着想なのか。この問題を考えなければならないだろう。

器局は、紫檀、黒檀などの唐木や国産であれば桑や桐で造られ、箴筒のように大型ではなく小形の箱型で、扉をつけて道具の出し入れができ、室内の煎茶席で使用する。野外での使用には、取っ手をつけて持ち運べる提籃^{ていらん}というものが別にある。

唐物、国産、時代も異なれば、形式や技法も変わって、上部に棚をつけ、箱が地袋形式になるもの、螺鈿の装飾、文字入りのものなど様々である。箱型ではない竹製の器局は、未だに見出だせないが、売茶翁の煎茶道具33品の絵図を収録する「売茶翁茶器図」(木村孔陽編、文政6年跋)には、急須や茶碗などとともに、湯を沸かす炉を入れる意味の爐龕で、「僊窠」と呼んだ愛用の籠が描かれている。



早稲田大学図書館蔵 (版本3見開目)

北川省伯作、木村兼葭堂伝之、と記され、紐がついているが担える作りではなさそうである。高さ1尺7寸、4本柱、天と底板縁の4辺も竹で、前面板戸が外れてものの出し入れができる。そして、前後左右4面は入子縁を回した中に黒く塗られた竹網代を嵌めた姿である。箱形ながら、四柱竹と網代を用いる雰囲気は、一般的な器局などよりも、はるかに鳳齋作品に近いといえよう。

さらに、とちぎ蔵の街美術館の「竹工芸の正統 飯塚鳳齋・琅玕齋・小玕齋」展図録の青木宏氏論文「飯塚三代の竹工芸」、及び河野エリ氏編「年譜」により、大正3年の東京大正博覧会に鳳齋の「竹製箴」の出品を知る。また、大正11年の平和記念東京博覧会には、弟で養子として三代目を継ぐ琅玕齋(1890-1958)が「厨子花籃」を出品した。この花籃は細竹を火灯形に大きく曲げて2本足とし、前面上部の網代が円弧に切られ、後方に足が1本



ある姿をしていた。7月29日発刊の都新聞^{みやこ}では、西行遺愛の箴の形を写したもので、高額^{みやこ}の売約になったという。弟の作品ではあるが、鳳齋の器局の3年前に、まるでアールデコ風のモダンな形の花籃が生

み出されていた。しかも、西行箴の写しであった。そういえば、明応9年(1500)作の海田采女佑本西行物語絵巻を、寛永7年(1630)に俵屋宗達が模写した渡辺家本には、3本足の箴が描かれている。いったい西行遺愛の箴とはどんなものであったのだろう。

関東大震災後、疎開先の栃木から帰った鳳齋は、フランスの工芸博覧会に出品する日本の竹工芸として、唐物を越える美しい形と他に真似のできない緻密な技の作品を構想する。日本伝統の箴は、尊い仏像や経典を納める道具であるから、煎茶の道具を入れる器局にも相応しいはず。4本の柱竹をぐっと曲げて止め、力を内に溜めた形はどうか。鎌倉時代まで遡るであろう箴の形をモデルとし、素材は籃物のような染め竹ではない白錆竹も使い、新しい網代組も工夫して、山野をゆく爽やかさも演出してみよう、と。

もし、鳳齋が蕨の細道文台硯箱を見ていたのなら、ささやかな個人コレクションの中で、2作品の運命的な出会いがあったことになる。映画のようなドラマチックなシーンを想いたい、まだ絵コンテは描けない。

ガラスと土の造形

8月1日(土)～10月4日(日)

オリエントやアンデスの古代文化の土やガラスのうつわ類を中心に、日本や中国の陶器なども展示します。その多様な造形とともに土の器の柔らかい質感と、ガラスの輝きの清涼感の競演でしばし外の暑さをお忘れください。



左上
ローマンガラス 皿 1-4世紀

中央
キプロス 地母神像 前1500年



右上
志野茶碗 銘草むら 桃山時代

左下
ペルー リヤマ形壺 1100-1470年

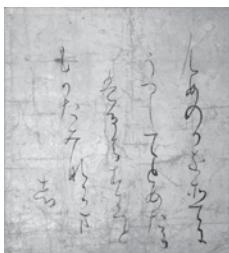
右下
三彩釉刻文鉢 イラン 9-10世紀

後半の9月19日(土)より、展示室2にて、日本の書画の名品が加わります。

書画名品の特別展示

毎年、春季に展示していた佐竹本三十六歌仙絵・頼基右や、寸松庵色紙下中央、英一蝶 布晒舞図下右 などの重要文化財の名品を秋季に展覧します。

佐竹本三十六歌仙絵と寸松庵色紙は、近代の数寄者たち垂涎の書画名品で、手にいれるまでの逸話も数多くあります。布晒舞図は、舞妓が舞う姿をいきいきと描いた江戸風俗画の傑作です。是非、ご覧ください。



ギャラリートーク

9月21日(月・祝)
9月23日(水・祝)
午後1時から
美術館にて
担当 依田 徹



唐物茶入「玉垣文琳」は、千利休の時代以前から記録の残る、大名物の一つ。400年前の大坂城落城で壊れてしまい、奈良の漆屋・藤巖により修復され、昭和まで徳川将軍家の宝物として伝えられてきました。同時に秋田藩佐竹家の家宝「佐竹本三十六歌仙絵」について、それらの歴史と見どころを解説いたします。

「暮らしと建築の美 — 遠山邸研究会」のご案内

今年度2回目の講演会を下記の日程で開催いたします。
参加のお申し込みをお待ちいたします。

第11回 講演会 11月7日(土) 13時30分より

講 師 文化財建造物修復技術者
茅葺き建築研究者 日塔 和彦 氏



「日本の茅葺き・ 世界の茅葺き-多様な茅葺き技術」

茅葺き屋根の建物は日本独自のものではなく、ヨーロッパなどにも茅葺き建築が残り、現在も建てられています。魅力ある多様な茅葺きの歴史や民俗文化について、ご講演をさせていただきます。

遠山邸の顔であり、特色の一つである茅葺きについて、専門的なお話をうかがうのは初めてでございます。表玄関を茅葺きの形式とした遠山元一の心を探るヒントがあるかも知れません。是非ご参加ください。

- 【申し込み方法】 ◆ 定員80名(先着順)
◆ 講座料300円、別に入館料700円が必要です
◆ 電話 遠山記念館(049-297-0007)か、
メールで(tkkk@e-kinenkan.com)宛てに予約をお願いします
◆ 講演終了後(3時予定)に、遠山邸をご案内いたします

第六回 お座敷美術講座

10月10日(土) 13時30分から 遠山邸の座敷にて

「陰翳礼讃を体感する — 床の間の陰翳と金屏風の耀やき」

文豪 谷崎潤一郎の名随筆「陰翳礼讃」で説かれる日本家屋の陰翳の美について、遠山邸の座敷の場と光りをもとに追体験をしてみます。名文の通りなのか、異なる感性になる部屋なのか、邸宅ツアーを行います。

担当 久保木 彰一



- 【申し込み方法】 ◆ 定員20名(先着順)
◆ 講座料300円、別に入館料700円が必要です
◆ 電話 遠山記念館(049-297-0007) で予約をお願いします

賑やかな器・物語る布—古代アンデス工芸への旅—

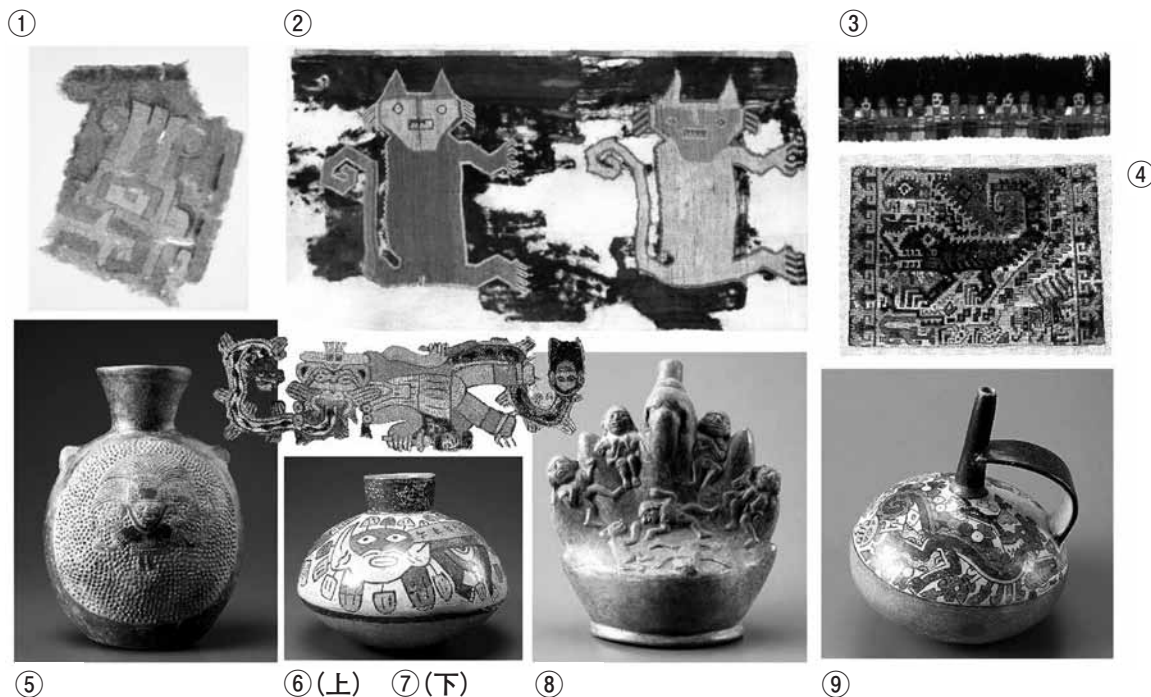
10月10日(土)～11月29日(日)

南米大陸の背骨と称されるアンデス山脈。天を衝いて南北に連なる山並みの西側は帯状の海岸砂漠が縁取るように伸び、東には湿潤なアマゾン源流地帯が広がっています。古代アンデス文明は緯度や高度の変化が織りなす複雑な自然環境の中で生まれ、16世紀のスペイン人によるインカ征服の時まで様々な文化が盛衰を繰り返してきました。

神殿や墓地などの遺跡から多数見つかる土器や染織などの工芸品には、当時の人々の姿がリアルに表されるものもあれば今では謎の不思議なモチーフも見られます。文字を持たなかった古代アンデスの人々はこれらの文様や造形にどのような意味を込めていたのでしょうか？

今回のアンデス展では主に、文化を超えて繰り返し表される神獣や神人などを表現した土器と染織品を中心に展示いたします。時に残虐な、また時にユーモラスな表情を見せる「神様」たち。当館のアンデス工芸コレクションを巡りながらその「聖性表現」に隠された精神世界を旅してみましょう。

《主な展示品》(会期中展示替えはございません。)



(写真 いずれもペルー)

① 獣神文様描染裂 チャビン文化(前800—前500年頃) ② 猫科動物文様縫取織裂 ^{ぬいとりおりぎれ} チャンカイ文化(後1100—1470年年頃) ③ 人形縫編房飾裂・部分 ^{ぬいあみ} ナスカ文化(前200—後500年頃) ④ とかげ・神人文様綴織布 モチェ文化(後100—800年頃) ⑤ 黒色陶神人文様浮彫注口壺 ^{つづれ} チムー文化(後1100—1470年頃) ⑥ 獣神文様刺繍裂・部分 パラカス文化(前500—前200年頃) ⑦ 彩画獣神文様壺 ナスカ文化 ⑧ 褐色陶山中儀式形鑲型注口壺 モチェ文化 ⑨ 加彩獣神文様把手付注口壺 ナスカ文化ほか、約160点を出品予定。

関連催事のご案内

◆ 講演会

第1回 「生命の虹-アンデス・シャーマニズムの世界-」

講 師 実松 克義氏(立教大学名誉教授)

日 時 10月31日(土) 13:30~15:00

南米大陸の中央アンデス地域には独特の思想を持つシャーマニズムが存在する。この地域にはかつて古代アンデス文明が栄えた。その文化伝統は現代の先住民族文化にどのような形で残されているのであろうか。その内容と本質は何であらうか。ペルー、ボリビアの諸地域で活躍する様々なシャーマンを訪ねながら、現代に受け継がれるたぐい稀な古代の伝統と世界観をやさしく解説する。

第2回 「古代人の心と暮らしの拠り所、神殿遺跡を探す、掘る。」

講 師 鶴見 英成氏(東京大学総合研究博物館助教)

日 時 11月21日(土) 13:30~15:00

アンデス文明は神殿から始まった。神殿はひとたび建つと維持・改築・増設の努力を人々に課し、人口増加、食糧増産、思想の錬磨、技術の向上などを触発しつつ、広範囲に増殖したからだ。ならば、すべての始まりとなった「最初の神殿」はいつ、どこに、なぜできたのだろうか。講師は「祭祀のみならず生存のための場でもある」との視点から、神殿を発見し発掘し、この遠大な問いに挑んできた。今夏の発掘成果をふまえて文明起源研究の最前線を示す。

★いずれも 聴講料：各回300円(美術館にて入館手続きをお済ませの後、会場受付にてお支払い。)

会 場：当館大会議室(事務棟地下1階)

電話およびメール inoue@e-kinenkan.comにてお申込みください。定員80名(先着順)

◆ フォルクローレ・コンサート

10月18日(日) 13:30~

出 演 慶應義塾大学ラテンアメリカ音楽研究会

会 場 本館(遠山邸)大広間

ペルー、ボリビアなどの高原地方に伝わる民族音楽「フォルクローレ」を日々演奏する学生メンバーの演奏会です。アンデスの壮大で優美な調べをお楽しみください！

*演奏曲目：「コンドルは飛んでいく(El Condor Pasa)」、
「アンデスの旅人(El Sarir)」他

◆ ギャラリートーク

10月17日、11月14日、28日(全て土曜日) 13:30~

美術館展示室にて展示担当学芸員が行います。

★いずれも事前申し込み不要。入館料だけでお楽しみいただけます。



加彩楽人形鑲型注口壺
モチェ文化

◇お得な2回割引入場券もご利用ください！◇

●レトロな空間で、ノスタルジックな音楽を
手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会 Part 17

11月3日(火・祝) 13:30~14:30

場所：本館大広間 先着50名様 入館料のみ

和風建築の技術の粋を集めて昭和初期に建てられた、遠山邸の大広間で、今ではほとんど忘れ去られてしまったSPレコードの鑑賞会パート17を行います。SPレコードは、エジソンが蝋管式のレコードを発明してから、大量生産に向く円盤型になって、音楽を記録する唯一のメディアとして一世を風靡しましたが、割れやすく、記録できる音域も時間も限られ、やがてLPレコードの出現によって姿を消しました。しかしながら、当時の名演奏家・名指揮者の演奏は、SPレコードでしか聴くことはできません。貴重な記録の中から、クラシック曲からはテノールのエンリコ・カルーソーなど伝説的な歌手の歌声や童謡・唱歌などを聴く予定です。電気を一切使わず再生されるノスタルジックな音をお楽しみください。



なお、ご自宅に、SPレコードをお持ちの方は、当日お持ち頂ければ、飛び入り再生も受け付けます。

寄贈品

昨年度は、お二人の方より下記の貴重な美術品を御寄贈いただきました。
ここにご紹介の上、改めて御礼申し上げます。

●谷 喜和子 様(東京都台東区)

白地菊藤模様帷子…写真1
江戸時代末期
他7点



写真1

●杉原 たく哉 様(埼玉県戸田市)

友禅染訪問着
春そよ風(杉原 聡作品)…写真2
昭和60年
他2点(原寸下絵付)



写真2

新ミュージアムグッズ



遠山記念館では、新しくミュージアムグッズを準備しております。第一弾は、重要文化財の英一蝶「布晒舞図」の手ぬぐいと、仁阿弥道八「黒楽銀彩猫手焙」、小林古径「白菜図」のデザインによる一筆箋の予定です。担当学芸員は他にも計画を進めておりますので、どうぞお楽しみに。

黒猫箋・白菜箋 各350円 (写真はイメージです)

昨年度の催事報告

2014年6月21日(土)

- ・土曜講座「小袖模様に見る絞り染」(講座と映像鑑賞)

2014年6月28日(土)

- ・ゆかたの着つけ教室

2014年5月4日(日)・11月2日(日)

- ・手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会
Part 14, 15



2014年11月9日(日)

- ・第3回 お座敷美術講座「布晒舞図 プレミアム鑑賞会」

2014年11月24日(月・振休)

- ・第4回 お座敷美術講座「茶席で見よう! 楽茶碗」

2015年2月7日(土)

- ・親子で楽しむワークショップ&ギャラリートーク
「投扇興遊びと展示解説」(共催 川島町教育委員会「地域子ども教室」)

「雛の世界」展関連行事

2015年2月21日(土)

- ・ご当地グルメとコラボレーション!
古今雛 遠山邸2階での特別公開と郷土料理「かわじま呉汁」を楽しむ会

2015年2月25日(水)～2月28日(土) 3月3日(火)

- ・雛祭りの日ガイドツアー
毎日2回開催 「雛の世界」展と遠山邸の解説案内

2015年3月1日(日)

- ・遠山記念館 雛祭りの茶会
一日4席開催及び「雛の世界」展と遠山邸の解説案内
茶会担当 依田 徹(当館学芸員)



2015年3月7日(土)

- ・ふるさと歴史講座
「切り絵体験教室と遠山記念館見学」(共催 川島町教育委員会)
「雛の世界」展と遠山邸の解説案内

その他

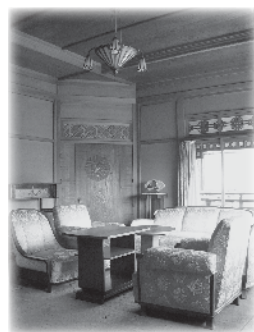
- ・投扇興を楽しむ会
毎月1回 開催 計12回開催

遠山邸2階の特別公開

遠山邸は中棟のみ2階建てとなっています。そこは建物が建てられた昭和初期の雰囲気を濃厚に醸し出す和洋折衷の不思議空間。当時の職人たちの技の数々を堪能していただける特別公開日に、ぜひご来館下さい。

9月26日(土)・10月12日(月・祝)・11月21日(土)

- ◆公開は 午前11時から午後3時までとなります。
開館時間と異なりますのでご注意ください。



図録販売のお知らせ



「没後四十年 清水比庵 温かき歌人のまなざし」

今春、ご好評のうちに終了しました特別展の図録を引き続き、販売いたします。明治から昭和にかけて、独自の感性で詩・書・画一体となった作品を制作し続けた歌人であり、近年、人気が高まり続けている「絵手紙」の先駆者でもある清水比庵。そのやさしく深遠な芸術世界を、ぜひお手元にどうぞ。

A4変形版 48ページ 1,500円

オールカラー 作品44点、絵手紙28点 収録

- ◆郵送ご希望の方は、送料100円をプラスして現金書留にてお申し込み下さい。

利用案内

入館料 一般 700円 学生 500円
中学生以下は無料

※団体20名以上は2割引となります

交通 ●東武東上線・J R埼京線 ⇨ 川越駅
●西武新宿線 ⇨ 本川越駅
●J R高崎線 ⇨ 桶川駅

川越駅～桶川駅間の東武バスで牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

開館 午前10:00～午後4:30 (入館は4:00まで)

休館 月曜日、年末年始
(月曜日が祝日の場合は開館し、翌日休館。
※今年の9月の連休時は、24日(木)が休館日です。)

美術館のみ展示替え休館

(邸宅と庭園をご覧いただけます。)

7月7～31日、9月18日、10月6～9日、12月1～20日

☎ 詳しい展覧会情報は下記でご覧いただけます。

URL <http://www.e-kinenkan.com>



遠山記念館だより 第49号

2015年7月発行

編集発行 公益財団法人遠山記念館
編集担当 小野 恵

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675

TEL 049-297-0007
FAX 049-297-6951